

十、唯一道

幾多の新興宗教が断然既成宗教をしり眼に見て世にはびこってくる。われらは眼前の事実としてこれから幾多の問題を与えられる。

人間を無智へ無智へとつれていって、そこに樹てられる思想や宗教があり、人間をあらゆる方面より教育して、最高文化人として、そこに樹てられる思想宗教がある。一は無智なるがゆえに信じられ、一は智者なるがゆえに信じられる。

後者は人間を必ず深く教養してその世界につれてゆく。知るべきことを知りつくし、聞くべきことを聞きつくし、見るべきことを見つくして、そこに生まれてくるのが、親鸞聖人の信心の世界であった。

聖人の信の世界では、微塵ほどの不純物の混入さえも許さない。人間の我から発散するあらゆるものにものを言わせない。信ずることによって何物かを得ようとする功利的な一切を許さない。

智慧の聖火をもって、一切衆生の煩惱の薪を焼きつくし、一切衆生を先とし、己を後にして、しかもだれよりも、純粹に仏に帰命しつつ願生浄土するものが、浄土より還来せる還相廻向の菩薩の精神であった。この還相廻向の菩薩の生活を憶念してのみ成就される往相信心の生活であった。

1

仏教は無我である。無我とは自己を空しうして、全我を捧げて生きることではあるが、それが成立つためには、腹の中に巢食う我の大虫小虫の大駆除をしなければならぬ。無我ならぬ生活は、ひつきょうこの心中の我の毒素が表に現われてくる生活のことである。

だが腹の中のこの我の毒虫は巧みに巢を造り、相をくらまし、カムフラージュして、容易にその正体を見せない。たいがい掃除がすんだようでも、一の我は二になり、四になり、八万四千の我の虫となつて、人間を色青ざめた病人にする。

だがこの腹の中の我の虫は、バクテリアのように、はなはだ強くして、またはなはだ弱い者である。強い体には何のバクテリアも食い入って害することができないように、真に強い人には、私の害虫は食い入ることができない。

バクテリアには日光は禁物である。我は仏の智慧光の前にはひとたまりもない。強いとは、暗において強いことであり、弱いとは光の前に弱いことである。

我をそのままにおくと、いろいろな症状が現われてくる。英雄主義や、遊蕩三味の享楽主義や、利己的個人主義や、反逆的な平等主義や、そうした嫌なものはいくらでも出てくる。自らを苦しめるとともに他人をもまた苦しめる。そうなればなるだけ、

我は自分が悪いとは思わないで、他を恨み、他を呪いつつ、しかも人格の本質を失つて、没落へ没落への一路をたどる。

三塗とは、地獄、餓鬼、畜生のことであるが、塗とはぬるという字である。よくはなはだしい苦しみのことを塗炭の苦というが、塗炭どころではない。地獄のことを火塗、餓鬼のことを刀塗、畜生のことを血塗といわれる。劇悪酷苦を現わすのである。塗は塗毒であつて、毒にうずもれ毒に没むという意である。また塗は途と同じで、険難の途のことである。

我はいつもわれをこの三途の苦へと誘うのである。

この恐るべき我のご機嫌をとり、我の求めに応じて「金がもうかる。」「災難が来ない。」「運がひらける。」「病気を治す。」といったことをならべたてて、神と結ぶところに、現在流行の諸宗教の存在発達する唯一の原因がある。

それでも、大学の先生も、学士も高位高官も、学校の校長さんも入つておられるからという。しかし、いかに学士だろうと校長さんだろうと、ほんとうは賢くないのだ。仏教のいう智慧がない。

真理の普遍妥当性と、人間の多数決とを混乱させてはならない。

「それ八万の法蔵を知るといふとも後世を知らざる人を愚者とす。たとひ一文不知の尼入道なりといふとも後世を知るを智者とすと言へり。」

蓮如上人の絶唱、千古の金言である。後世を知るとは、つまりは信心の智慧のことである。仏作つて眼を入れず、八万四千の知識を授けて、智慧の眼を開かない教育、大学を出たとて、宗教的には野蛮人の域を出ないのは当然である。

「一宗之繁昌と申すは、人の多く集り威の大いなる事にてはなく候。一人にても人の信を取るが一宗の繁昌に候。」

これもまた蓮如上人の金言であつた。しかるに一宗の繁昌を威勢の盛大なることであるとして、一人の信心をほり下げることが忘れているのが現在の宗教ではないか。その上人がまた、真の念仏者は国に一人、郡に一人といわれる。

極難信とは、無教養の大衆を好餌でかり集めたものではだめなこと、たたいて、すぐつて、教えて、鍛えて、最深、最高、大信心底に到ることの極難であることを教えられたともとれる。禅家は、一個半個を化せという。

今の時代は手取り早く結果を求める。根本よりも結果である。その簡単に結果を得ようとするのが、新興宗教を生んだ一つの原因である。大衆が求めるものは、真理であることよりも利益のあるものである。昔の人は、死んで極楽に参るといふ功利的なことから仏教に來た。しかしそれになんらの感じを持たなくなった現代人たち

には、仏教は何でもないものになった。それに反して新興宗教は、現実にご利益を説いた。そこにも原因の一つがある。

だが、そうしたことのほかに、新興宗教には熱がある。焼きつくさずんばという意気がある。仏教にはそれが無くなった。「一人を信心」「一個半個を」ということは、本当には、とても強い熱、真の力を持つことなのだ。興業価値の多いような講師をうならせて今日一日を安心しようとするところには、熱はない。

無智にも熱があり、我にも熱があり、智慧にも熱があり、無我にも熱がある。しかし一つは病熱であり、一つはもつと深い健康から出る熱である。病熱退治すべく、無熱更生すべきである。

宗教の動きこそは、真に社会の動きを示すものである。宗教のレベルこそは、社会文化の高さを示すものである。

鉄道ができてこのかたできたような町には、団結もなく、深いものもない。昔の御城下は何といつても軽薄でなく、底力を持つ。宗教だつてそうである。

民族を粗野な宗教に追いこむことは危険である。とともに深いだけで熱のないこともいけないことである。大衆の深い歩みが、時に尊い聖者を生み、一人の聖者が大衆を感化する。高い教えのみが、民族の血から尊いものをひき出す。

人数は少なくとも真面目に歩もう。間口は狭くも奥ゆきを深く生きよう。われらの心の底を打ちぬくと、直に、絶対の涅槃に通ずる、その深い底知れぬ呼吸が、仏凡一体の南無阿弥陀仏の世界である。

非常時動乱の嵐の中に何がおきようと、われらは、たじろぐことなく、祖聖の真実教に忠実に歩みきつてゆくべきである。

仏教復興の現状もまたけつして、ほんものではない。浮かれてはならない。依然として忠実に一筋に生ききる者は、国に一人、郡に一人であるかも知れない。盛んであろうが、衰えようが、真理の命ずるままに、一生を貫く者のみ、まことに大乘菩薩道の行者である。